氏　名（本籍）	高橋憲昭（たかはしけんしょう）（京都府）
学位の種酒	文学博士
学位記番号	乙第19号
学位授与の日付	昭和55年7月15日
学位授与の要件	学位規程第3条第2項
学位論文題目	（主論文）**現代社会における宗教現象の社会学的研究**
	（副論文）**「群集と大衆」**
	「佛教的社会行為と交換理論」
論文審査委員	（主査）文学博士 教授 池田義祐
	（副査）文学博士 教授 金松賢諒
	（副査）教授 石原鉄雄
	（副査）京都工芸繊維大学教授 豊島覚城

学位論文審査要旨

〔論文内容の要約〕

本学位請求論文は，主論文上・下二巻および副論文二篇一巻から成る。主論文は『現代社会における宗教現象の社会学的研究』で，上・下二巻を通じて200字詰原稿用紙812頁におよぶものであり，副論文のⅠ『群集と大衆』とⅡ『仏教的社会行為と交換理論』とは，いずれも既発表の論文である。（前者は「哲学論集」〔大谷大学哲学会〕第18号，1971，pp. 19～41，後者は同じく「哲学論集」第24号，1977，pp. 1～12）主論文たる『現代社会における宗教現象の社会学的研究』は，第一章「現代社会」と第二章「社会調査からみた現代社会における宗教現象の実態」と第三章「現代社会における祖先崇拝の社会学的考察」とから構成されており，その前・後に「序」と「結」とがおかれている。

著者は先ず，本研究が基本的に特殊社会学（又は分科社会学）の一つとしての宗教社会学の立場からなされるものであるとし（宗教社会学の方法論については前記の副論文Ⅱに述べられている），特に J. Wach の宗教社会学

の見解（宗教と社会との相互作用説）を受け容れ，彼の提唱する宗教社会学の二種の重要な課題のうち，社会が宗教に与える影響の側面を分析する課題に着目し，現代社会の特殊状況（大衆社会状況）がわが国における宗教現象（それを構成する基本的単位としての個人の社会的行為—宗教的行為）におよぼしている影響を社会学的実証分析によって解明することを提言している。かくして本論文は第一章より第三章まで以下の如く展開されている。

第一章では，現代社会の構造と現代人の社会心理が考察されている。現代社会の前段階としての近代社会は，資本主義を生み，かつ資本主義から生み出されてくる合理性，特に形式合理性が支配的であり，それが社会集団や社会関係，さらにはそれらの意味的底礎となっている人間の社会的行為に現われてくる社会である。このような近代社会に対して現代社会は，近代社会とは異なる大衆社会状況を示しており，そこから必然的にもたらされる人間連帯の脆弱化，確実性の喪失，不安感などによって準拠集団を欠落した人間が「暗示性と不安」「無意味と無力の感情」をもつ存在となりつつある事実が指摘されている。その詳細は，前記の副論文Ｉのなかで述べられている。

次に第二章は，本論文の主要な資料部分であり，175頁より526頁におよび，全体の紙数の半ば以上が割かれている。本章では第一章で明らかにされた現代社会（大衆社会的状況を中心とする）のなかにおいて，宗教は果たしてどのようなあり方をしているのか，これの究明が主眼となっている。そこで先ず，宗教社会学者 P. Berger などの最近の文献によって現代社会における理論的，かつ社会形態学的レベルでの宗教に関する巨視的考察を窺ったのち，ついで第二次大戦後，わが国で行われた一般の人々の日常的行為と意識とに受けとめられている宗教の実態調査10例をとりあげて，それぞれの内容を詳細に分析している。すなわち，著者自らが調査し，又は調査に加わった京都府下南山城地方の農村（1957年実施，54名），京都市山科地区調査（1971～72年実施，525名），京都市北区紫野地区調査（1975年実施，114名），大阪府門真市地区調査（1975年実施，153名），岐阜県立女子短期大学学生調査（1978年実施，453名）をはじめ，著者以外の人々の手に成る福島県相馬地方の調査（1954年実施，755名），老年社会科学会調査（1963年実施，3,890名），東京都周辺地区調査（1964～65年実施，13,095名），京都女子中・高校生家庭調査（1970年実施，1,215名），兵庫県養父地方の調査（1974年実施，1,104名）の結果（被調査者数は有効回答者数を表わす。合計21,358名，内，著者が直接関与して

いるもの1,299名）をとりあげて，統計的に把握された現代日本社会における宗教現象としての個人の行為や意識を綿密に分析している。それらの詳細な内容を限られた紙幅で述べることは容易ではない。従って，ここではそれらの結果の中心点のみに言及する。これらの一連の調査は，既に示したように1954年から1978年まで25年間の時間の巾があり，また調査対象も地域的に都市，近郊村，農村，山村などと異なり，年齢的にも老年層，壮年層，青年層などと異なり，宗教の点でも分散しているが，そこから比較的に共通の事実として抽出することができた注目すべき現象は，祖先崇拝に関する行為（儀礼など）および意識の平均的に高率（50%内外）を示す存在である。しかも更に，それらのあり方や内容に立ち入ってみると，かつての伝統的・家的規範志向から個人的・選択的志向へと少しずつ変化しているということであった。

この事実をふまえて第三章では，現代社会としてのわが国における祖先崇拝の存在と変容の原因について社会学の立場から解明がなされている。

先ず，従来の祖先崇拝に関する分析理論，特に社会学のそれを再検討し，その理論と現代の実態（調査の結果）とが必ずしも対応していないことを指摘する。すなわち，これまでの社会学における一般的な祖先崇拝の理論では，社会が開放化され移動性が高まり，いわゆる都市化が進行するにつれて，伝統的な家父長的家族が衰え，そのなかで祖先崇拝の儀礼も意識も衰微し，消滅への一路を辿ると説かれているが，わが国の現代社会で著者や他の人々が調査した結果にみられる現実はそうではなく，それらは依然として社会事実として存在しているのであり，また必ずしも衰退の傾向を顕著に表わしていない。そうであるかぎり，そこに従来の通説とは異なった新しい説明原理が求められねばならないと述べ，以下の如き著者独自の見解を展開している。

総理府広報室その他の調査機関の発表した多くのデータによって，著者は大衆社会における疎外感の問題をとりあげ，その内容を分析し，現代人の不安感は主として大衆社会状況における人間関係にみられる疎外に根ざすものであることを明らかにしている。人間は一般に疎外から生ずるテンションの回復を志向するものであるが，現代の日本人はその回復の場を家族（伝統的な家ではない）に求めるのである。そのことは日本人の価値意識や社会意識について，ほぼ毎年実施されている全国調査のデータによっても裏づけられる。現代の家族については，ややもすればその病理的側面のみが強調され，核家族はもはや現代社会の重要な基本的集団としての役割を果たしえないか

のような錯覚にとらわれがちであるが，事実は必ずしもそうではなく，逆に家族への回帰傾向が生じてきている一面もある。このことはひとりわが国のみの特有な現象ではなく，同じく大衆社会状況のなかで，疎外感に悩む欧米の社会，特にアメリカ社会にあっても共通に見られる現象である。例えば最近の宗教社会学者である T. Luckman や P. Berger なども，理論的次元で現代アメリカ人の家族への回帰を説明する。彼らによれば，アメリカ人は複数化の社会（多元的で相互に有機的結びつきを欠く社会）としてとらえられる現代アメリカの大衆社会状況のなかで，「公の領域」における共通の究極的価値を喪失して，「私の領域」としての家族を志向し，そのなかで私的な究極的価値を求め，自己の Identity を回復しようとする。いわばそこに人びとの homeless mind をつなぎとめる場としての家族が考えられている。このように現代社会の疎外状況は，人びとに再び家族の重要な意義を再発見させたようである。かくして家族は種々の面に新しい意味づけがなされてくる。それらのなかで著者は，個人の自発的選択を基礎とし，しかも家族が一つの単位となる宗教的なまとまりとしての家族の新しい意味づけに着目する。こうした新しい意味での家族——それはもはや伝統的な家父長的家族（家）ではなく，現実に存在している核家族——への回帰が祖先崇拝の意識および行為を現代社会において変容しつつ存続せしめていると説くのである。一方，現代社会の根源的不安を別の面から Rollo May は「意味喪失の脅かし」からくる不安と，「死」の不安とにわけるが，前者を人間連帯の喪失状況におきかえると，現代社会はある意味でこの二者を内包した社会であるといえる。しかも前者からくる不安は，死の非人間化，合理化（死の物象化）と相俟って「死の不安」をより増幅すると考えられる。このような社会心理的背景から，わが国における祖先崇拝儀礼は新しい意味づけをもって再生し，それを支える人びとの意識の変化のうちに存在しつづける。従ってそれは従来の伝統的な家観念に根ざした社会規範としての，あるいは祖先を愛惜追慕する共同体的な心性に裏づけられたものとしての祖先崇拝ではない。個としての自己自身に激しい寂寥感をもたらす連帯感の喪失や，非人間化され合理化された死の不安から脱却し，自己の Identity を再構成する場である現代家族（核家族）におけるシンボルとして，まさに核家族の核として祖先を再発見し，専ら自己中心的な立場からの祖先崇拝が出現しつつあると解釈し説明している。

以上が本論文第三章の要約であるが，最後に著者は本論文の「結」において，本論文が従来の社会学の理論では，その存続を否定されるべき祖先崇拝の現象が，現在なお存在し，かつ俄かに衰滅するような兆しを見せていないことを実態調査を通して明らかにし，その理由を社会学的観点から以下の如く要約しているのである。すなわち，現代社会における大衆社会的状況からくる疎外，特に人間連帯や Identity の喪失からくる個人の不安感，さらにそれを反映した死についての不安感などが，家族への回帰を通して祖先崇拝の存続に大なる影響を与えているのではないかと述べている。それは現代社会の特殊状況（家族をとりまく大衆社会的状況）が宗教現象の一つとしての祖先崇拝に与える影響の考察であるが，逆にまた，そのことを通して現代社会の特質をより明らかにするものでもあった。今後の課題は，本論文第二章の補足研究としてさらに広汎なデータの蒐集・整理・検討をなすこと，第三章での社会的説明の基礎をなす方法論的枠組の研究であることを強調して，本論文を結んでいる。

〔**審査結果の要旨**〕

本論文は，わが国において社会学の領域よりする宗教社会学（以下宗教社会学と略称する）の数少ない研究成果の一つとして注目すべきものであるが，これまでの宗教社会学が多く外国の宗教社会学（例えば É. Durkheim や Max Weber や J. Wach などの）の学説的文献研究に力点がおかれていたのに対して，著者はその研究の主力を専ら経験社会学的な実証分析におく。すなわち宗教を経験的な日常生活の次元における一般大衆の社会的行為（行為者の主観的意味，動機付けを中心とする）として実証的に把握し，その重要な特質の一つとして祖先崇拝にかかわる事実が存在していることを指摘している。

次に祖先崇拝についてのわが国における従来の宗教社会学的見解（例えば前田卓『祖先崇拝の研究』1965，森岡清美・山根常男編『家と現代家族』1976など）を検討し批判して，大衆社会的状況下における社会心理学的な分析からする個人中心的な家への回帰説に基づく新しい祖先崇拝への社会学的解釈を試み，この方面の未開拓の領域に独創的な研究の一歩を印した。この点，ひとり宗教社会学の分野のみならず，社会学一般への著者の貢献は決して少なくないものと思う。

しかしながら本論文は実証的な研究方法の面でなお若干の問題点なしとし

ない。すなわち調査の統計的な操作に関し自らの調査においても，又他者の調査結果の利用に際しても，母集団からの標本の抽出についてやや不十分な点があり，従って一般化への過程において細密な条件分析が欠けているところがある。これとともに資料から導き出された結果に対する解釈にあたって，結果についての検証が不十分であるきらいがみうけられる。かかる問題は，しかしながら経験社会学の現状からある程度さけがたいところであり，本論文のもつ積極的な貢献に対して，将来著者が十分に補正しうる程度の瑕瑾であると思う。

以上の審査により，本論文は文学博士の学位を授与するに価するものと認められる。